1月12日（火）初等外国語教育法　リフレクション

①グローバル化が進行する社会ではコミュニケーション能力が必要となります。そのため、英語科でもコミュニケーション重視の授業にシフトしてきています。しかし、成績をつける段階には、文法項目が習得できたかという従来通りの評価方法が行われてしまっては、コミュニケーション重視の授業をしても意味が無いと感じました。だからこそ評価というのはとても重要であると思いました。指導と評価を一体化させるためには、なぜこの指導をするのかを、考え続けなければいけないと思いました。

②前回の期末課題の動画を踏まえて、今回の授業で指導と評価の一体化について考えることができた。授業の目標を達成するための指導があり、その目標を達成できたかを定める評価がある。このことより、目標・指導・評価は互いに関連しあっている。評価をおこなうことで、指導や目標が適切だったのかを判断することができる。講義中のお話で、児童生徒に評価基準を問う話があった。これは、子どもにとっての達成のレベルを知ることができるので、より児童生徒にあった指導・評価ができるのでとてもいいと感じた。また、グループセッションでは、評価しない指導についての議論が白熱した。中学生ならどこまで認めるのか、評価する際にはどのように行うべきか、単元での達成目標と前単元のつまずきの兼ね合いについてなど、様々な意見を交流できとても有意義であった。

③今日の授業では、事前に課題でも取り組んだ「評価」について考えました。ネット環境が悪く、グループセッションの途中でズームが落ちてしまい、最後まで授業に参加することが出来ませんでしたが、先生のお話から、自分の受けてきた評価、そして指導を振り返りながら、「評価すること」とそれに合わせて「指導すること」についても考えることが出来ました。何かに例えて考えてみると、今まで受け出来たテストのやり方や受験、評価は本当に正しいものだったのか？と疑問に思いました。でも、私はみんなと比べると成績が悪い方ではなかったので、今まで成績の付け方や指導にマイナスな感情を抱くきっかけがなく、今まで気づけていなかったなと感じました。成績がとても悪い子は、自分とは違う何か、不満などを感じていたのかな？と疑問に感じました。

④今回は「評価の仕方」について講義で学んだ。評価と目的は明確な脈絡があり、適切に教師は一致させないといけないと感じ、評価の仕方を学ぶと同時により良い評価へつながるのは評価に見合った適切な目的だなと感じた。

⑤今日は指導と評価の一体化について深く考えましたが、私が今まで受けてきた授業はスピーキングについて評価される機会がどれだったのか分からないということに気付きました。そこで付属小学校がやっていたという個別のインタビューテストは、クラス全体でスピーキングをしているときには見えない部分が見えたというのを知り、とてもいいと思いました。また、評価規準を子どもと一緒に決めるのも、一体化の面ではとてもいいと思いましたが、あらかじめテストの内容がわかると子どもは準備できるので、それはスピーキングの中のやり取りの能力ではなく発表の能力になってしまいやすいのではないかと思いました。本当のやり取りのスピーキング力は、準備がない状態でも英語で答えられることだと思うので、その点についても見極めてテストを行いたいと思いました。

⑥今回の講義を受けて、外国語教育にとって大切なのは、「目標と評価の一体化」ではなく「指導と評価の一体化」であることが分かった。講義内では、“水泳選手”を例えに挙げて説明されていたが、泳ぐタイムを早くするという“目標”に向けてあらゆる知識や力を身につけたうえで結果を出して“評価”を得るよりも、実際に何度もプールで泳いで練習して“指導”に生かすためにタイムを計り、それによって結果を出して“評価”を得ることを推奨するような内容であった。この説明を受けて、私は『経験に勝る知識なし』といわれるように、何らかのアクションを起こすまたは通してしか学ぶことのできない“何か”を子どもたちに経験させたいというねらいが指導要領に明文化されたのだと感じた。

⑦今日の講義では評価について学びました。目標と指導の一体化に加えて指導と評価の一体化にも取り組んでいかなければならないことを知りました。目標と評価の一体化は目標に届いているか、あるいはあとどれぐらいで届くのかで評価できるが、指導と評価の一体化は授業中に評価について話すことなのかどうか、完全には理解できませんでした。また、評価方法が変わるので、それについても勉強しないといけないと思いました。評価の役割の一つに、教師が目標に達しているかどうか、子どもたちの学習の習熟度を図るための１つの目安になり、評価というものは子どもも教師も現状を知り、改善したり、伸ばしたりできる良い機会であると思った。

⑧評価についての話で私たちのグループで1番話になったのが、どんな声掛けが理想的なのか、ということです。子供が文法を間違っていたら、評価はしないけど指導はするから、先生は正しいのを言う。とありましたが、それで子供たちは違いに気づくのか、という意見がありました。それよりもしっかり、そうじゃなくてこうだよと言った方が「指導 」になるのかと思いました。評価の仕方が細かくなっていたことに対し、大変だけどその方が正確なものになると捉えられました。私が中学校のときのspeakingのテストは覚えていたらA、教科書を見ながら言えたらB、教科書みても止まり止まりならCという感じで、カタコトでも覚えて全部言えたらいいという印象を受けました。

⑨今回の授業で指導と評価についてグループでディスカッションをしたことが1番心に残った。 話の中で、小中高では評価の仕方にで小学校では評価について話す機会がないが中高では評価が重視される傾向にあるなどの違いがあると感じた。また、どちらにも共通していることが、教師の主観が関心意欲態度に入っているのではないかと思った。指導と評価の一体化では、できているか確認することが目的となっているが、このままでいいのかというふうに感じた。今回のテーマとは離れてしまうかもしれないが、この授業で今まで受けてきた授業が全て正しいという目で見るのではなく、本当にこれでいいのかと改めて考える機会になった。これから教師になった際には、今までのやりかたをただ真似るのではなく、考えて参考にするところとしない所を考えていきたい。

⑩今回は評価について学習した。評価は学習者の学習改善と指導者の指導改善の双方に役立つように行われなければならないということが重要だと感じた。指導はしても評価せずというのは、中学で習う考え方(文法や発音の理解)を小学の時点で求めているわけではないうえ、英語という外国語への抵抗を減らすために小学校で教科化しているはずなのに、中学と同等の評価をしてしまうと｢間違うことへの恐怖心｣の植え付けに繋がってしまう可能性があるからなのではないのかと考える。また、提出物を提出させることで点数を付けるという評価は一体誰のためになっていたんだと、授業後の先生との雑談で思った。最後に、水泳選手の例えはとても分かりやすかったと個人的には感じた。

⑪今回の評価の話で、学習者と指導者で評価基準と評価規準を一致させないといけないことを知りました。また、今回のグループワークでは中学校・高校での英語の評価の仕方について話し合いました。みんなが共通に感じていたことは、話すことへの評価の仕方がいまいちわからなかったことでした。また、もっと、話すことへの授業内容をはっきりとし、もっとやって欲しかったという意見が出ました。自分が教師になったら話すことへの自信がなかったらあまり自信を持ってできないなと感じました。私は今回の授業で話すことへの評価の仕方、もっと積極的に取り入れることの課題を見つけれたので自分が教師になる場合積極的にできたらいいなと思いました。

⑫「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」という５つの領域に対してそれぞれ、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の観点がありそれを評価して、最終的に総括の評定として「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評定を出す、という評価の仕方になっている。これをもとにしたときに、私たちが今までやってきた課題を提出するのはどこに当てはまるのだろうと思った。テストの点数がよくても課題を出していなかったらその分評価は低くなっていたし、その課題もただ提出するためだけにやっているのか、ちゃんと自分のためになるようにやっているのかなどの裏の部分がわかりにくいから、それを出したからという単純な理由で評価することは難しいと感じた。 Speakingでは、授業中に一斉に評価したり児童の様子を見たりすることが難しいと思うから、録音したり先生と一対一でインタビューテストなどを行うことで、評価することができると思った。

⑬今日の講義では、評価の在り方・進め方について学習しました。私が中高生のころの定期テストは、教科書やワークの問題がそのまま出されていたため、単なる暗記学習になっていました。暗記が得意な人が点数を取りやすく、テストで英語の授業の評価をされていました。そのため、英語力が身についていなくても高い評価を得てしまうということがありました。指導者と学習者で評価基準を共有することはとてもいい考えだと思います。子ども自身が何のためにこの活動を行って、どのような資質・能力を身に付けることができるのかを事前に把握しておくことで、子どもたちが目標をもって学習に取り組み、意欲や関心を高めることができると思いました。そして、子どもたちに身についてほしい能力を考え、それに沿ったテスト方法や評価の仕方を考えなければならないと考えました。また、グループ活動では子どもの主体的な学びに教師がどこまで子ども主体の学びに干渉するかという議題で話し合いをしました。子どもの文法の間違いを評価するのではなく指導すると学び、子どもたちが自ら正しい文法に気づかなければならず、教師が正しく決まった答えを与えてはいけないと学習しましたが、それでは子どもが間違いに気づくことができないのではないかという意見がでました。私は、子どもたちの様子を見ながら、何度も同じ間違いを繰り返すようなら、教師は正しいものを教えてもいいのではないかと考えます。教師の役割を考えながら授業に取り組んだり評価を行ったりすることが大切だと学びました。

⑭今日の講義を通して、指導(目的)と評価の一体化というものが重要なことであると学ぶことができた。講義のなかで、スピーキングをどのように評価するのかという話になったが、自分が教師になって児童生徒のスピーキングをどのように評価するか考えたとき、具体的な項目をあげることができなかった。それと同時に、自分がスピーキングをしていたときに、教師がどのように評価をしていたのかを考えたが、なにを基準にして評価しているのかが分からなかった。そのため、自分自身で明確な評価基準をつくったり、児童生徒間でのコミュニケーションを通して、児童生徒同士で評価をし合うということも、手段のひとつになるのではないかと考えることができた。

⑮今回の講義では、評価の方法について学んだ。グループワークでは、指導と評価、目標と評価の違いがよく分からないため二つの違いについて話し合いをしたり、評価の方法がこれから変わることに対して自分達が教師になったときにどのように対応すればよいのかと考えを深め合った。私は前回の課題の動画の中にあった「I like dog」 を「I like dogs」に直さなければならないことをすぐに気づくことができず英語の指導に不安を感じたことを話すと、グループの人も同じようなことを考えており、小学校教師だから英語は分からなくてもよいという考えはなくし、教師自身が英語の知識を増やし子ども達に適切な指導を行うことが大切だと話し合いをした。 　また、評価は子どもの順位付けをしたり、子どもを数字で評価するだけが目的ではなく、指導者の評価にも影響しており、子どもの評価から自分の教え方を振り返るきっかけになることを知ることができた。そして、子どもの技能や達成度だけを評価するのではなく、達成するまでの過程を知り全体を通して評価することが適切だと考えさせられた。

⑯今回の授業では、期末課題に引き続き、｢評価｣について考えたのですが、グループワークの中で自分とは違った解釈や方法が出てきたので、動画視聴だけに留まらず、やはり話し合うのも大切だなと感じました。また、小学校の外国語活動での評価で、指導はするけど評価はしない（文法など）という話と関連して、中学校の単元での評価の際に単元とは関係の無い基礎的な部分ができていないときに、どう評価するかという話になりました。出てきた意見としては、前提として、基礎ができていないと単元の理解度も低いのではないかや、既習事項だから評価してもいいなどの意見が出てきたのですが、1番適当だと感じたのは、テストなどで文を書いたときに、基礎的な間違いを見つけた時バツをつけるのではなく、三角やマイナス1点などして、指摘または訂正することで評価するという形でした。これは、一般的にされている方法で、実際私もこういう評価を受けた経験があったので、納得できたのですが、他になにか良い方法はないのかなとも思いました。今回の講義でより評価について考えられたと思います。将来教員になったときも、この授業のように話し合ったりして模索しながら考えていけたらなと思います。

⑰今回の講義で指導と評価が一緒である必要性を再確認することができた。私たちのグループでは小学校は評価のことを教師からあまり強くいわれたことはないが、中学校、高校になるにつれて評価のことを言われる頻度が高くなることに注目した。自分たちが受けてきた教育は課題を出しなさい。それは評価が上げるために。と言う考えだったし、そう教えられてきた。しかし、ワークは自分の学力のためにやることを前提として取り組まなければ意味がない。ただ答えを写して提出することをしていては自分の力にはならない。そうならないためにも指導と評価が一緒でなければならないことを実感できたとてもいい学びができた。

⑱今日のグループディスカッションでは、評価について話し合いました。色々な意見が出ましたが、小学校、中学校、高校、それぞれの評価について深く議論することができました。中学、高校では、何かにつけて評価に響くと生徒に話していますが、小学校では児童に向けて評価の話はほとんどしないという意見がありました。それは小学校では評価を大切にしていないのか、中学・高校で言われている提出物が本当に正しい評価なのか、知識技能を身に付けさせるためにはどのような評価が大切なのかとても考えさせられました。教師が楽をするために子どもたちにとっては作業のようなことをさせていないか、何のための評価なのかを考えて指導、評価を行うべきだと思いました。

⑲今回の講義を受けて、評価を筆記試験のみで行うのは良くないと感じました。私がこれまで受けてきた評価は中間・期末テストで、平均点などを出されたりして他の生徒と比較されるものでした。私は中学生の頃は英語が得意だったので、しっかり勉強すると結果がついてくるという経験をしていました。しかし、高校生になると一気に範囲が広くなり、勉強しても結果がついていかないことが多くなり、成績が悪かったのを覚えています。今回学んでみて、筆記試験でできても使えないと意味がないので、「話すこと」も評価に入れつつ、子どもと教師が一体となって評価基準を作っていくべきであると強く感じました。また、私が中学生のころの体験で、私は中間テスト、期末テストどちらも学年で一番を取ったのに、ノートの自由ページに単語を練習していなかったということで、意欲・態度が低いとみなされ、学期末の評価が下がったということがありました。ノートなどは、日ごろ頑張っている生徒がテストでうまくいかなかったときの救済措置として使われる評価対象だと思いますが、授業で使わなかったページを空いているからといって、分かっている単語をひたすら練習することに時間をかけることに疑問を持っていました。当時、テスト勉強を真剣に行わず、ただ授業中にその自由ページを単語で埋めていたクラスメイトの方が成績が良かったので、それ以降必要性を感じないままノートを埋める作業をして中学校生活を送っていきました。今回はあまり関心・意欲・態度の評価について触れなかったと思いますが、私はこの経験から、評価物によって意欲・態度を見るという部分に疑問を持っているので、また意見交流などで他学生の意見なども聞いてみたいと思います。

⑳今回の講義では、評価について考えることができました。私たちが話し合ったことは、今まで受けて来たテストやその振り返りを受けて、本当に学習改善につながっていたのか、そういう経験があったかということです。結果、みんな誤答レポートを課題で出されていたから提出したり、成績を他人と比べたりするだけで、そこまで学習改善につながっていなかったのではという話になりました。テストでは、同じ内容がまた次の範囲で出るわけではなく単元がどんどん進んでいってしまうので、今回の範囲を振り返っても次につながらないという考えがあるのではないかと考えました。学習の内容を振り返るような誤答レポートよりも、学習方法を振り返るレポートを作成するほうが、子どもたちの学習改善にはつながるのではないかと考えます。どの部分をどう評価するのかを考えることはとても難しいことだと思いますが、子どもたちが次の段階にステップアップできるような評価の仕方を考えていきたいなと思います。

㉑私は今回の講義を通して、指導と評価の一体化とは、指導をしながら評価をしていくところがポイントであり、指導者と学習者の間で評価規準と評価基準をしっかりと共有することが必要であるということを学んだ。私は今まで、評価については教師だけが知っておけばいいものだと思っていたが、教師だけではなく、学習者にも共有し、どの程度までできたらどの評定がつくかなど、学習者も知っておく必要があるということが分かった。先生の話の中で、琉大附属小学校では、子どもたちと一緒に評価規準を作っていたということを聞き、このように子どもたちと評価について確かめ合うことで、子どもたちもより勉強に対する意欲が増し、良い評価をもらうことにもつながると考えた。また、最近では、スピーキングのテストが導入され、筆記では測りきれない能力を測ることが求められているということを学び、英語の授業では、いかにコミュニケーションが大切であるかを改めて実感することができた。さらに、今までは4つの領域でしか評価していなかったが、これからは、聞くことや読むことなどを分けて15スロットでより細かく評価するということを学び、これは1人1人の学習状況を丁寧に評価するために必要となるものであると考えた。他にも、指導計画を立てる際は、評価の計画も立て、単元ごとに何を評価するかバランスをとっておくことが大切であると学んだ。ブレークアウトセッションでは、指導はするが、評価をしない項目はどこまで教えばいいのか、カッコの穴埋めも必要なことではないかなどいくつか疑問がでた。また、テストの点数は良くても、提出物を出さなかったら評価が下がった経験があり、提出物は、評価を下げるものではなく、出したらプラスになるものとしてあるべきではないかという議論もあった。評価について考えれば考えるほど難しく、疑問に思う点もいくつか出てきたため、教師になって評価をする際は、評価についてしっかり頭に入れた上で行う必要があると感じた。

㉒評価という言葉は、教師だけではなく子供たちにとっても身近な言葉ですが、こんなに複雑で難しいものだとは思っていませんでした。 何のために評価するのかというのをしっかりと理解した上で行わなければ、意味のないものになってしまいかねないということが分かりました。 テストが低い人はノート出してね〜そしたら評価あげるからねというのは、本当の意味での評価ではなかったのかもしれないということに気づけて良かったです。 教師によって、基準は変わってくることもあるかもしれませんが、何よりも1番に子供たちが成長するための手助けになるものとして行っていくことが大切だと思いました。また、子どものことだけではなく教師自身も振り返って共に良い方向へ進んでいけるような評価を行えるようになりたいです。

㉓今回の講義では、期末課題の評価の映像も参考に、評価について考えました。授業のはじめの方で、中間・期末テストはどのように役立ったか？という問いが出されて、私自身テストは成績のためのものという認識で、テスト期間が終わればそこで出てきた知識は必要なものもあるけど、覚えなくてもいいものもあると言う認識をしていました。しかし、このままこれからの子ども達も私と同様の認識をしてしまうような評価は子どものためにも、教師としてもいけないことだと感じました。子どもが成長するために学校はあり、テストのために学校があるわけではないと言うことを意識して評価と指導を行う必要があると感じました。また、「指導はするけど評価はしない」という事をおっしゃっていて、子どもの実態をとらえながら、誤った知識や文法は訂正しつつ授業を行なっていくことが必要だと感じました。しかしこの場合に、どの程度教えたらいいのかというような疑問がグループで生まれました。これも児童の様子を見ながら必要な範囲で教えて、繰り返す中で定着させ、ある程度定着してきたらまた新たな知識を加えて、など段階を踏んで指導を行うといいのではないかと感じました。

㉔今日の講義で特に印象に残っているのは、受容と発信の区別についての話です。難しい単語だからテストに出すのではなく、学習者が日常生活で使う単語を中心に出題すべきであると学びました。私はこの話を聞き、学習者が実際の会話で自分の思いや考えを英語で表現できるようにするためには、滅多に使わない難しい単語を出題するより、実用的な事柄をテストで扱った方がいいと納得しました。しかし、私が中高校生の時を振り返ると、どうしても「難しい単語だから出す」というイメージが強く、日常生活で使う、使わないについてはあまり触れられていなかったように思います。今日の話を聞いて、これからは「実際の会話」を想定して評価方法も考えていかなければならないのだと分かりました。また、話し合いでは、テスト後の誤答ノートの意義についても話しました。私は適当に書いて提出し、あまり身にならなかったので、「誤答を正す作業も大事ではあるけど、根本的な改善として学習者自身が学習習慣を見直すなどした方が良いと思う」という意見にとても納得しました。そして、学習者自身の自己評価も重要事項だと考えさせられました。

㉕学習評価は、学習者にとってはどこまで到達できたかといった自己評価、目標に向けての学習の調整につながるので、教師は評価を成績をつけるためのもののみとして捉えるのではなく、学習者が自らの学びを調整し目標に向けて粘り強く学び続けられるように評価し、これからの指導につなげなければならないと今回の授業を通して感じた。また、評価の方法を考えるとき、その手段がそれぞれの目標達成につながるものかを吟味しないと評価の意味がなくなってしまうと学んだので、課題や提出物を出すときは児童・生徒の学習段階や各教科の目標に沿ったものかをよく考えて指導を行い、児童・生徒が評価を参考にこれからの学習に生かせるような評価を行いたいと考える。

㉖今回の講義を受講して評価についてグループディスカッションを行っていく中で、テストについての話になりましたが、結局テストという「確かめ」を行わないと評価はできないのではないかという話になりました。授業の中で例として出されていた水泳の例も途中でタイムを図るというのは、どれくらい力がついているのか点数という数字に出すということで、その結果を指導に生かしていくという点でテストは学校教育の中で0にしていくのは難しいのではないかと思いました。ただ、水泳の例でいうタイムを出すというのは結果であり、ゴールまで泳ごうとする態度などこをどのように評価していくのか教師がその視点を明確にする必要が大きくあるなと改めて感じました。

㉗今回は評価について先生のお話や他の受講者の意見も聞きながら自分の中でいろいろ考えさせられた回でした。そもそも学びの度合い成長具合は目に見えてすぐ分かるものではないので子供一人一人の学びを評価するのって難しい事だと自分の中では捉えていて、この評価で一喜一憂したり高校や大学の進路などにも関わってきたりというのも現実であるわけなのを知っているからこそ教師になってからけっこう苦労する点なのではないかと感じました。単に教師からの目線だけで学びを評価するのではなく、知識技能、思考力判断力表現力などの項目をクラスメート、自己評価なども加えいろんな視点からその生徒を見るというのが大切なのかなと感じました。また、教師が評価基準に則し評価を設定していく上で身につけた知識、能力だったり生徒自身が意欲的になれる活動を取り入れ、発揮する場も教師が用意しなければいけないのではないかとも感じました。グループの話し合いでは提出物やテストの割合、自己評価を教師が評価することについてのお話が出てきて生徒だった頃は一概に評価と言っていたけれどとても奥が深いものだと実感しました。

㉘今回の講義を通して、自分が受けてきた英語の勉強がテストのための勉強になっていたと痛感した。評価と指導が一体化していないと、学習者も評価されないことは学ばなくなってしまう。逆に、テストで良い点を取るための勉強となり、スピーキングなどの評価外の学びはおろそかになり、暗記重視のつまらない勉強法になってしまう。そうならないための、パフォーマンス評価の充実、普段の授業での評価を通した学習を図っていく必要があると学んだ。また、学習評価は、序列をつけるためのものではない。児童の資質、能力がいかに育成できたかを一人一人に自覚させることが大切である。評価を通して、学習の方法を見直すことにつながる。評価を見たら改善する努力を行う必要があり、指導者は改善されているかどうかを確認する。評価を見直すことは指導の改善につながることが理解できた。

㉙グループセッションの中で、「テストの点数は良かったけど提出物を出していなくて成績が２になった。学習に対する意欲はあり、読んで覚えるタイプだったから提出物を書く時間がもったいない。」という意見が出ました。確かに、勉強の仕方や記憶の方法は人それぞれで、提出物だけで意欲や態度は測り切れないと思い、児童一人一人の特性や学習状況を把握することが望ましいと思いました。理解度や意欲などを様々な角度から平等に評価できるようにしていきたいと感じました。

㉚今回の授業はネット環境が悪く聞き取れない部分もありましたのでできる範囲でリフレクションを書きます。今まで受けてきた評価で自分の高校時代は一学期に1回はスピーキングテストがあり、別室で先生のiPadで録画されながらスピーキングをするテストがありました。またよくディベートが行われていましたが終始録画されており、当時はとても緊張して嫌でしたが今考えると学んだことをしっかり評価してもらえる方法の1つであったと考えました。定期テストでの評価はテストに向けて勉強になり、しっかり身についたとは言えないと感じる人もいましたが、教師の立場で考えると授業の様子だけで判断するのも難しいのかなと感じました。

㉛私は、今回の授業のブレイクアウトセッションの中で「評価」について考え、どこまでをAとするのか、という基準を決めるのが難しいなと感じました。また、特に中学校や高等学校においてですが、学校によってその基準が多少異なるため、高校入試や大学入試の時にあまり平等ではないように思いました。そのため、ここまではA、ここまではBという目安をある程度示したほうが良いかもしれない、という意見が出ました。 また、私の高校では日々の課題(提出物)がとても多く、それが評価に大きく影響するということがあって、先生たちも「テストの点数は高くても提出物を出していない人にはA評価をあげません」といっていました。私は、「授業内容をしっかり理解して活用できるようにすること」が授業の目標であるとしたら、課題は児童生徒がその理解を行いやすくするための手助けのひとつにすぎないと考えています。課題プリントをやることで理解できる人もいれば、教科書などの本を読んだ方が理解できる人もいる、しゃべって実践した方が理解できる人もいる、、、学び方の適性は人それぞれだと思うので、目標を児童生徒が達成できたかどうか、を重視して評価していきたいと感じました。しかし、児童生徒の能力には差があり一生懸命努力していても中々結果が出ない子がいることや、発表などを行うのが苦手で本当は理解できていてもそれを発信できない子がいることを考慮しなければならないため、提出物なしで評価をつけることは難しいのかもしれないなとも感じました。評価の方法も様々なので、バランスを取りながら、評価できるようにしていきたいです。

㉜今回の授業では目標と評価の一体化について改めて学習しました。授業のスライドの中で紹介していた評価例で沢山の評価方法があって、こんなにも評価の種類があると分かり驚きました。私たちのグループでは「スピーキングテスト」をどう評価するべきか、という話をしました。その中で、どのレベルを基準にするべきか、ラインを引くのが難しいという意見も挙がりました。また、ALTの先生に担当してもらい役割を分担してもらう。という意見も出てとても参考になりました。今、色んな講義で「指導と評価の一体化」について学習しているので、これからもっと理解を深めて現場に立った時に児童生徒たちにとって為になる授業ができるようにしていきたいです。

㉝今回は、評価について学習しました。以前の動画の通り、評価は教師の授業改善のためと、子どもが学習を振り返るための理由からつけます。外国語では、これまでの目標と評価の一体化に加え、指導と評価の一体化に力を入れて評価をしていきます。指導と評価の一体化とは、授業計画の中に評価を組み込むことによって、目標達成の経過途中であっても授業を改善できる点で優れています。しかし、授業を進めている途中で評価を行うため、教師のやるべきことが増え、負担になることが考えられます。その負担を減らすために、あらかじめ、年間の授業計画の中に評価を組んでおき計画的に評価を行い、すべてを評価するのではなく子どもたちの成長に必要な学習内容のみを評価として記録するなどの工夫を行います。評価は子どもの成績に反映され、親にとってもとてもシビアな内容になります。そこでストレスなく数値できるように様々な工夫を凝らすことが教師には求められると思います。子どもたちの成長のため、また、自分自身の技術アップのために効率の良い指導の工夫を行っていきたいです。

㉞今回のグループの話し合いはとても為になるものであった。通常学校での学習評価の仕方では、全体の中でその子はどこの順位に入るのだろう、授業内容は理解できているのかなどで評価をしているように感じる。しかし、特別支援専修の学生の意見を聞くと、評価基準はその子どもが元々持っていた能力がどれだけ伸びたのか、伸びしろがどれだけあるのかで評価をつけるという。これにくらべて通常学校での評価の仕方は、元々勉強を苦手とする子どもにとってはとても不利になるのでは無いのかと言う意見が出た。英語を苦手とする子どもが多くの知識・今まで以上に熱心に勉学に励んでいたとしても、目標を達成していなければ完璧にできる子どもよりは評価が低くなってしまう。全体の目標を設けることももちろん大切だが、それぞれの子どもたちにあった小さな目標から判断して評価をつけるべきでは無いのかと考えた。

㉟今回の講義では、外国後の授業の評価について考えを深めることが出来た。グループセッションで意見交換をしたとき、皆定期テストの点数と提出物で評価が決まっていたと話していて、私が中学校の時もそのように評価されていたことを思い出した。教師の話を聞いているかを図るために課題を課すのも一つの手ではあると思うが、それに重きを置きすぎると、外国語という教科の評価とは違うものになってしまうと感じた。また、外国後の授業はコミュニケーションの場であると思うので、単元ごとに評価することも大事だが、全体的に見て、前よりもコミュニケーションをうまくとることが出来ているのか成長を評価することも大切だと感じた。今回は自分が今まで受けてきた評価について考え、どのような評価にしたら良いか考えたが、実際に授業を観てからも考えてみたいと思った。